

聖書箇所：ルカの福音書 8章 19～25 節

説教題：神のことばを聞いて行う人たち

1 わたしの母、わたしの兄弟たちとは

19 節で、イエスに会うために母マリヤと兄弟たちが尋ねて来たたとあります。何の目的で尋ねてきたのか。そのあたりの事情についてはマルコの福音書に詳しく説明があります。イエスはナザレという村に住んでおりました。そのイエスがある日村から突然いなくなりました。しばらくすると、イエスの噂が聞こえてきました。その噂のどれもが、自分たちの知っているイエスとはまったくかけ離れています。それで村の人たちが言い始めました。「あれは気が狂ったに違いない。」イエスの母と兄弟たちは、このことに心を痛み、イエスを村に連れ戻すためにイエスを尋ねてきたのでした。

これを知りましたイエスはこう言います。21 節。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行う人たちです。」この話しは 21 節で一旦終わり、22 節からは湖で出来事に移っていきます。前後のつながりがほとんど見えません。しかし聖書は綿密な配慮の上で書かれています。神のことばを聞いて行う人たちとはどんな人たちのことなのか。そのことを具体的に説明しているのか湖での出来事である。そう考えることができます。

2 弟子たちの側から

(1) 怒り

イエスは、「さあ、湖の向こう岸に渡ろう」

と言われます。このあと、大嵐になり舟に波が入って来て弟子たちは遭難しそうになります。弟子たちは大慌てで舟の中の水をかき出し、死ぬかもしれないと大騒ぎしているのに、イエスはぐっすりと眠っておられます。なんとなくユーモラスで、同時に不思議な印象があります。

イエスの弟子たちの多くはもともと漁師でしたから、ペテロを筆頭として舟の操縦にかけてはプロを自任しております。加えてガリラヤ湖は自分たちの庭のようなもの。多少の嵐にも慣れっこだったでしょう。その彼らが「私たちはおぼれて死にそうです」と叫ぶのですから、よほどのひどい嵐であったのだらうと思います。

こんなとき誰しもしてしまうことですが、たいいてい犯人捜しが始まります。そもそもだれが舟を出せと言いだしたのか。イエスではないか。あのイエスがこんなことを言わなければ、こんな危険な目に遭うことはなかった。そう考えるとだんだん腹が立ってきます。そのイエス。こちらは必死に水をかき出し一生懸命がんばっているのに、グウグウ寝ていました。ますます怒りに拍車がかかる。「先生。先生。私たちはおぼれて死にそうです。」足で蹴飛ばしてやりたくなくらい怒りに満ちた叫びであったと思われる。

(2) 恐怖

イエスは弟子たちに促され、風と荒波をしっかりとつきます。たちまちにして風は止み、湖

はまるで鏡のようになり波ひとつありません。つい先ほどまで、天と地がひっくり返らんばかりの大きな音がとどろいたのが、今は静けさがあたりを支配しています。

弟子たちは、先ほどまで死の恐怖に直面していました。でも今はそんな恐怖は去りました。ところが今度は別の恐怖が襲って来ました。彼らはこう言います。「風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

こんなふうにして25節まで読んでも、なんだか中途半端な状態で終わってしまう印象です。ここで弟子たちが大きく成長したとかそんなことは読み取れないように感じます。

3 新しい旅へ：心の向こう岸に渡る

(1) 闇から光の中へ

果たしてそうでしょうか。もう一度最初の場面に戻ってみましょう。イエスは「さあ、湖の向こう岸に渡ろう」と言っています。もちろんそれは、実際に湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に行くということをやっています。でもイエスは、今見たようにことばを語るだけで嵐を静めるほどの力を持っておられます。であれば、なにかを語ったのなら、語っておしまいではないはずで、なんらかの変化が起きるはずです。いったい、どんな変化が起きるのでしょうか。それはどこで起きることなのでしょう。そもそもなぜイエスは、向こう岸に渡ろうなどと言いだしたのでしょうか。

まず場所のことから言いましょう。イエスが湖と言っているこのことば、弟子たちの心のこと、あるいは私たちの心のことも指していると見ることができます。

イエスはあるとき私たちに語りかけます。「さあ、湖の向こう岸に渡ろう。」こんなふうにしてイエスは私たちに新しい旅に誘います。心楽しい旅とは言えません。大きな試練を経験する旅です。でもそれが私たちに必要だということです。私たちがつくり変えられていくための大切な歩みだと言われます。

弟子たちは、湖の旅でどんな経験をしたでしょう。大嵐の中でイエスに怒りをぶつけました。次に、静まりかえった湖を見て、イエスに対して恐怖を抱きました。「いったいこの方はどういう方なのだろう。」そんな強い疑問を抱きました。弟子たちの心が右に左に大きく揺さぶられていきます。揺さぶられることによって、それまでは闇の中に隠されていて目にすることがなかったものに光があてられます。闇の中からさまざまな苦い思いがわき出していきます。

それがイエスの方法です。そのようにして私たちをつくり変えようとしていたのです。

(2) 「聞いて行こう人たち」

21節の、「わたしの母、わたしの兄弟たち」とは、神のことばを聞いて行こう人たちです」のことばと、この湖の出来事がどうつながるのかわかりにくいと最初に言いました。

湖の旅を通して、イエスは弟子たちを「わたしの母、わたしの兄弟」と呼ばれる者に変えようとしています。この試練を通して、まだ不十分とは言え、神のことばを聞いて行こう者に変えられていつている。そう見ることが出来ます。

でも、ひとつだけ大きな問題があります。イエスはこう言っていました。「あなたがたの信仰はどこにあるのですか。」これはどういうことなのか。これは絶対に、弟子たちの

信仰が足りないというおしかりのことばではないのか。もしそうなら、この湖の場面は弟子たちが「神のことばを聞いても行う」者に変えられていくところだと言われても納得しかねます。

4 イエスの側から

(1) 招く

私たちは思い込みで、ひとつの角度だけで聖書を読んでしまうことがあります。でも別の角度から読むこともできます。湖の出来事をイエスの視点から見てみたらどうなるでしょうか。

舟が沈みかけ、危険に襲われたとき、弟子たちは何をしたでしょう。24 節。「そこで、彼らは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生。私たちはおぼれて死にそうです」と言っ

た。」先ほど触れたように、弟子たちの心の中にあったのはイエスに対する怒りです。言わば弟子たちは怒りをぶつけるためにイエスの所に近寄ったとも言えます。これをイエスの側から見れば、弟子たちを招いたという言い方もできます。

実はイエスはこの瞬間を待っていました。イエスに怒りをぶつけるなんて不信仰な事だと思うのでしょうか。いいえ。どんな動機でも良いのです。たとえ怒りをぶつけるためでも良い。イエスは、とにかくご自分のところに来ることを待っておられたのです。弟子たちはイエスに怒りをぶつけるのですが、そのまま受けとめてくださいます。というのは、イエスは弟子たちをわざと怒らせ、怒鳴り込むのを待っておられたからです。イエスが嵐の中でグウグウ寝ている姿が不思議でした。実は、周到に計算されていたことで、弟子た

ちをわざわざ怒らせるためであったとわかります。

(2) 信仰はすでにある

その次の場面です。弟子たちは互いに言い交わしました。「風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

弟子たちはこの時点ではまだ、イエスが神の子であり、救い主であることには気がついていません。でもこのとき考えました。「この方は誰なのだろう。」疑問が湧くから知りたいと思う。知りたいと思わなければ、いつまでたってもこの方が誰なのか気がつくことはできません。疑問が湧くということは、実はとても大切な一歩だったのです。

さきほど脇に置いていた問題の答えを出します。「あなたがたの信仰はどこにあるのです。」これはどういう意味か。てっきり、「あなたがたの信仰はない」と言っていると思ってきました。よく読むと反対です。弟子たちの信仰は、嵐という試練を経験することによって、実は与えられている。信仰が芽生えている。みことばの種が蒔かれ、芽を出したのです。イエスが成長させてくださっています。弟子たちはまだ気がつきません。気がつかないけれど信仰の芽はぐんぐん成長していきます。

私たちも弟子たちと同じで、普段はそんなことに気がつきません。苦しいことが起ると、「神などいない」と言って騒ぎます。あるいは、不信仰な事を口にしてしまった自分をふり返り、信仰が弱いとか、信仰などありませんと嘆くことがあります。でも、そんなことを言う必要はありません。私たちはすでに神のことばを聞いています。聞いたのなら、

神は私たちを行う者へと変えてくださるのです。

どのようにしてですか。今日見たとおりに、主が用意万端を整えてです。あらゆる手段を使って、私たちが主に近づくことができるようにとさせていただきます。

主に近づくというとき、主は遠くにおられるのですか。弟子たちが死にかけたとき主はどこにおられましたか。舟にいっしょに乗っておられたでしょう。主も舟に乗っていて、弟子たちと同じように危険な目に遭っていました。

「神などいない」と叫ぶことがあっても、よく見てください。実はすぐそばに神はおられます。主も私たちと一生に苦しみをともにされています。この主を信頼しつつ旅を続けていきたいと願います。